

Lightning



ニッポン旧車!

VINTAGE AUTO

10

1000円以上
10000円未満
100000円未満
1000000円未満





VINTAGE AUTO

Hot Impression

ヤマ編の

ホンネで語る リアルインプレ!



テレビやラジオで“ゆっくり走ろう”と言われながらも
多くの走り好きによって、首都高や海沿いの国道を勢いよく闊歩した名車C130ローレル
好きとか嫌いとかの枠から逸脱するかのごとく、多くの人々を驚かせた
そのユニークなボディワークは、ニッポン旧車の中で最もバタ臭さを感じさせる一台だ

text/K.Yamazaki 山崎和彦 photo/T.Sakurai 桜井健雄
取材協力/ロッキオーオート phone0564-58-7080

1976 NISSAN LAUREL
SGX with RB20 turbo



ナイスボディな
ローレルはアメリカ車
テイストが
いい!

VINTAGE AUTO
Hot Impression

ホンネで語る
リアルインプレ!



**RB20ターボで
ほどよい高速クルーズ
今見てもお洒落度の
高いクルマだ**

ブリストルを基に設定したというRB20は、それまで一般走行においての要として十分な加速性能をみせる。クルマの雰囲気に合わせてエンジンの性格やパワーもコントロールするあたりが、さすがに多くのマシンを手がけてきたショップだけのことはある。あえて5ナンバーにこだわったニッサン日本車。C130ローレルは、70年代に一所懸命クルマを生かした時代に熱いものを感じさせる何かがある。



パケモノに変身させることは簡単だ。そこをあえて、このローレルに用いているのはややおとなしい味付けにしているのである。とはいえエンジンはRB20のターボ。いざアクセルを踏めば現代のクルマの流れにおいて必要にして十分な加速、および高速巡航性能を持つていたことを記しておきたい。あくまでも味付けとして、往年の名車の雰囲気を楽しみたい大人好みになっているわけだ。当然ながら、もしユーザーが望むのであればこのRB20ターボのままでも、ブリストルと燃調のセッティング次第で目を見張る加速性能にすることも可能であるという。

ハードトップの大きな魅力のひとつ、ピラーのない窓をフルオープンにすると、ドライバースイッチが一回り大きくなったかのように感じ、実に気持ちのよい開放感に包まれる。そのまま腕をグッと出してクルーズする様子はまるでアメ車に乗っているような感覚！ ちゅっくり走っても気持ちのいいクルマだ。

もうパケモノなんて
呼ばせない……



ローレルが70年代に確立した元祖ビップカーのなごりをそのままに、動力性能を含めたトータルパフォーマンスを現代風にアレンジした1台。オリジナルパーツを活かしながらも、小振りなチレンスポイラーをさり気なく装着するなどして走りを楽しんでいる。白がとてよく似合うクルマだ。



Hot Impression
**1976 NISSAN
LAUREL SGX
with RB20 turbo**



1.インテリアも可能な限りオリジナルを残しながら、必要最小限に手が加えられていた。2.モダンターボエンジン搭載ということで、必要なインジケータ類が目立たないようにマウントされる。3.当時かなりゴージャスであったドアの内張り。アメ車のテイストを強く感じる部分だ。4.窓はとにかく広い。が、リアシートはかなり閉鎖的だ。5.6.一円玉の愛称で人気だったマークIIは走り好きのお約束アイテムだ。



私が初めてC130に乗ったのは今からもう30年以上前のこと。当時シヤコタンでバリバリマフラーのハコスカが愛車だった私にとって、ブルジョアな先輩が大学の合宿に乗ってきた新車のローレルのハンドルを握らせてもらった時に感じた、天使の羽に東ついているかのような静かであつたりとした雰囲気は衝撃的で、今でも思い出せる。

今回試乗したクルマは外観こそ30年以上も前のローレルだが中身は別モノで、エンジンはRB20ターボを搭載する。もちろん車格的にはRB25や26の換装も可能ではあるが、あえて5ナンバーを意識したチョイスであるという。確かに、とても大きく見えるC130のボディが実は5ナンバー枠に合致していることはすごく興味深い事実だ。特にリヤビューから見る印象は、「デザインの妙ここに極まれり！」と言わんばかりのもので、そんな面白い事実がこだわった2リフトターボ5ナンバーなのだ。こだわりの意味でもうひとつ面白いことがある。実はご覧のローレル、ターボエンジンを搭載しているがそのブリストルを踏み込んで低目設定し、アクセルを踏み込んで低目でも「ドカン！」とはこない味付けになっているのだ。もちろんこれは意識的にやっていることで、その真意はあくまでもこのC130というローレルがもつ堂々とした走りっぷりを尊重し、もの凄いわいでガツンと飛び出すような走りやセーブするといったもの。当然ながらロッキンオートの技術を使えば、このローレルとて数百馬力のとんでもない



1.効率を考えた装着されたインタークーラー。ターボ車の性能を大きく左右する重要なパーツだ。2.この角度から味わうZイスタムはまた格別だ。決まった足回りだけが見せる個性的なテイストが読み取れる。3.まるで純正ノーマルのように見えるエンジンルーム。この視覚的バランスのよさは走りにも共通している。4.ここまで仕上がったクルマに左側のドアから乗り込む。この気持ちよさこそバーガーテイストの証だ。5.クラシカルながらもスバルタンク耳象を大切に仕上げたインテリア。

1971 NISSAN FAIRLADY 240Z HLS30



派手過ぎず、それでも十分にスペシャリティカーとしてのオーラをビンビンに放つ1台。乗る者を無意識のうちに“本気”にさせるその味付けは、クルマ好きにはたまらないものがある。所有欲の湧く1台だ。

前後のホイールはワタナベの05Jと05Jを履く。タイヤはそれぞれ215/50-16と245/45-16となっている。オーバーフェンダーの大きさとオフセットの量が見事なまでにきれいにマッチングしている。

た後に、ロッキーマジックにてそのポテンシャルを高めると高めていた1台だ。注目のエンジンはR-33のGT-Rに搭載されていたRB-26に換装されている。ミッションはRB-20ターボ用のマニアルを装着し、R180のデフを組み込んでいる。基本的にはエンジンの補器類もR33のものを流用するが、当然ながらマフラーやインタークーラーといった性能を大きく左右する重要なパーツについては、ロッキータイトがオリジナルで製作している。実はこのオリジナルパーツの設計、製作こそがハイパフォーマンスの要であり、かたちにするまでにはもちろんのこと、組みあがってからのセット調整も出さず、気の遠くなるようなセッティングの時間と手間をかけているのだ。その甲斐あって走りは最高1Zカーとしての視覚的な魅力を残しつつも、異次元の走りを実現できるエキゾチックなマシンに仕上がっている。もちろん公道認済で、ここからさらにオーナーになるドライバーの要望に合わせた細かいセッティングを意図してから納車されるという、なんとも魅力的な1台だ。



Taste★
Beef Rice Burger
Let's eat Japanese Castles by
Burger Street

回転を上げての走りは
なんともソウルフル
五感を振るわせる1台



基本的にRB26をR33GT-Rより移植しているのだが、自然ながら車体の形状に合わせて様々なパーツをワゴンで製作することになる。この車体特有の形状に合わせて、インタークーラーを製作することもさることながら、それを効率よくマウントさせるのも大変な作業となっている。

前後に車高調整式のサスを装着し、テストを繰り返しながらセッティングを施している。ここから乗り手に合わせて更なるセッティングを行うという。



今回の巻頭特集のキーワードとなつてはいるが、アメリカンテイストとニッポン車をアメリカンテイストで料理する素晴らしい手を象徴したものだ。もちろんその手法が簡単なものではないことは想像に容易い。しかし、だからといって太平洋の向こうで盛り上がりつつある魅力的なムードメントを、ただ指をくわえて見ているだけでは悲しすぎる。そこで、ここではわが国、ニッポンでもしっかりとバーガースタイルを実践していることを証明する素晴らしい1台を紹介しよう。本誌でもすっぴんお披露目となった愛知県岡崎市にあるロッキータイトがプロデュースした240Zだ。



1971 NISSAN FAIRLADY 240Z HLS30

1601-01 Yamanashi 1100 4000 0100 0100 0100 0100
0100 0100 0100 0100 0100 0100 0100 0100
0100 0100 0100 0100 0100 0100 0100 0100



Taste★
Beef Rice Burger

Let's eat Japanese Classics by
Burger Style!



こだわりのHLS30
左ハンドルで味わう
ゼットテイストは格別だ

北米輸出仕様として生産されたHLS30。日本に逆輸入されたその左ハンドルのフェアレディZが、ニッサン・日産エンターテインメントの歴史を刻み、その理由はなんとしてでもその魅力を伝えるべく、そして早速その魅力を体験してください。

